

庭園の沿革

造園に関わった人々

- ①初代: 八条宮智仁(としひと)親王は秀吉の養子になったが、実子が出来たので縁組が解消され、八条宮を創設した。その後、兄の後陽成天皇が弟の八条宮に譲位をしようとしたが、家康の反対にあって頓挫した。智仁親王は漢学、和歌に造詣が深かったが、1615年所領が桂に変更されたのを機に、藤原道長ゆかりの山荘の再興に着手した。古書院、御茶屋は出来たが、1629年に突然の死で工事は中断された
- ②二代: 八条宮智忠(としただ)親王は前田利常の娘富姫(ふうひめ)との結婚で財政的な基盤が出来たため、1641年から再び工事が始まった。中書院、賞花亭、笑意軒、園林堂、外腰掛などを作った。親王は後水尾上皇の御幸に備えて、御幸門、御幸道を新設し、「月の桂」に因んで欄間、襖の引き手には月の意匠を凝らした。
- ③後水尾上皇: 修学院離宮を造営中の彼は、既にお忍びで山荘を訪れていた。改めて正式に訪問を予定していたが、1661年の内裏も焼けた大火で実現しなかった。上皇の正式な訪問が実現したのは、大火の2年後の1663年である。三代目の穩仁(やすひと)親王のとき。

庭園の特徴

当庭園の特徴は全ての事に注意を払い全く同じ景色が無く、行く先々で新たな発見の連続である。いわば自然と人工の調和、建築と庭園の融合と言えようか。具体的に特徴を列記すると

- ①桂川の水による苑池、流れ
- ②大小の築山、複雑な汀線の中島
- ③多くの茶亭、祠堂を結ぶ苑路と船着場
- ④一望にできないように、視界を遮るように構成されて、行く先の造形に期待を膨らませる仕掛けになっている。
- ⑤近代的なデザインが随所に施されている。従来の庭園とは異なり、近代的なデザイン感覚だ。

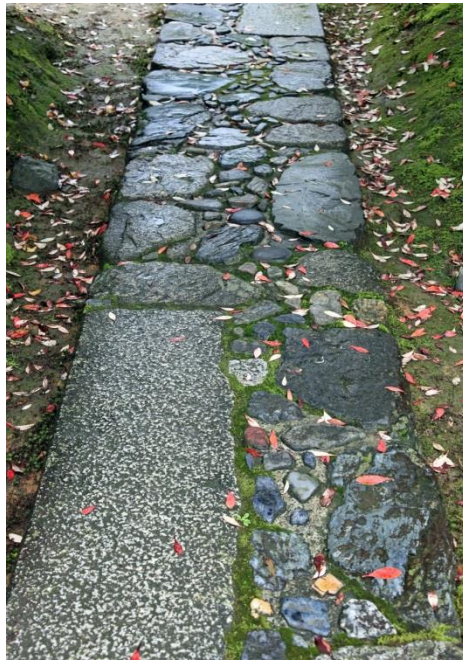


当庭は自然風景の縮景ではなく、人工的な洲浜の先にアクセントとして灯籠や人工的な切石橋で天橋立を繋げている

斬新なデザインと色彩



霰こぼしの延段は土橋とは中心線を変えているが、遠近法効果を狙っている



外腰掛け前の「行の延段」は小堀遠州の孤篷庵のスタイルだ



園林堂横の斬新なデザイン



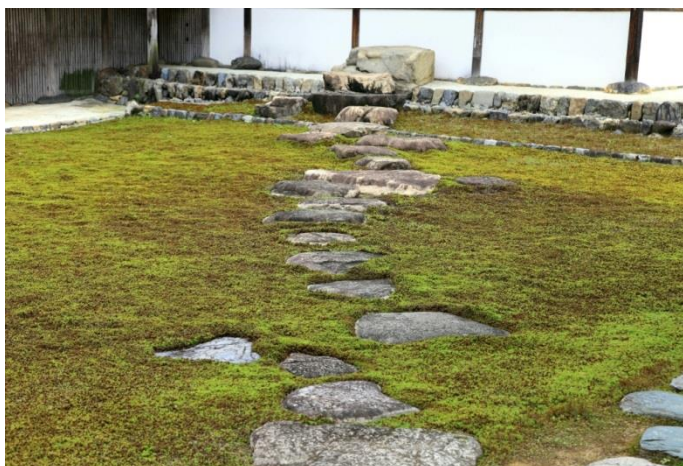
笑意軒横の「草の延段」の色彩に注目



古書院前の「草の延段」



御輿寄せ前の「真の飛石」



古書院西側の七五三飛石(三・七・三・五)物見石2石あり



御輿寄せに向かう延段のデザインは角(すみ)違いの手法



二河白道の白い橋(長さ6m、幅0.7m)。橋の奥の護岸にある火炎状の尖った石は、赤い火の川を象徴し、橋の手前の白い石の川がある(流れ手水)。行人は釈迦の教えを信じ阿弥陀の世界に渡る。



栗石のみの洲浜は、新しい感覚の造形である

亭榭めぐり

亭榭は下記写真のほかに卍亭もあるが、飛石、延段、舟で巡りそれぞれの風景を楽しむ。亭榭は春夏秋冬を象徴。



松琴亭 松琴亭の松は冬を表わす



賞花亭 賞花亭の花は春を表わしている

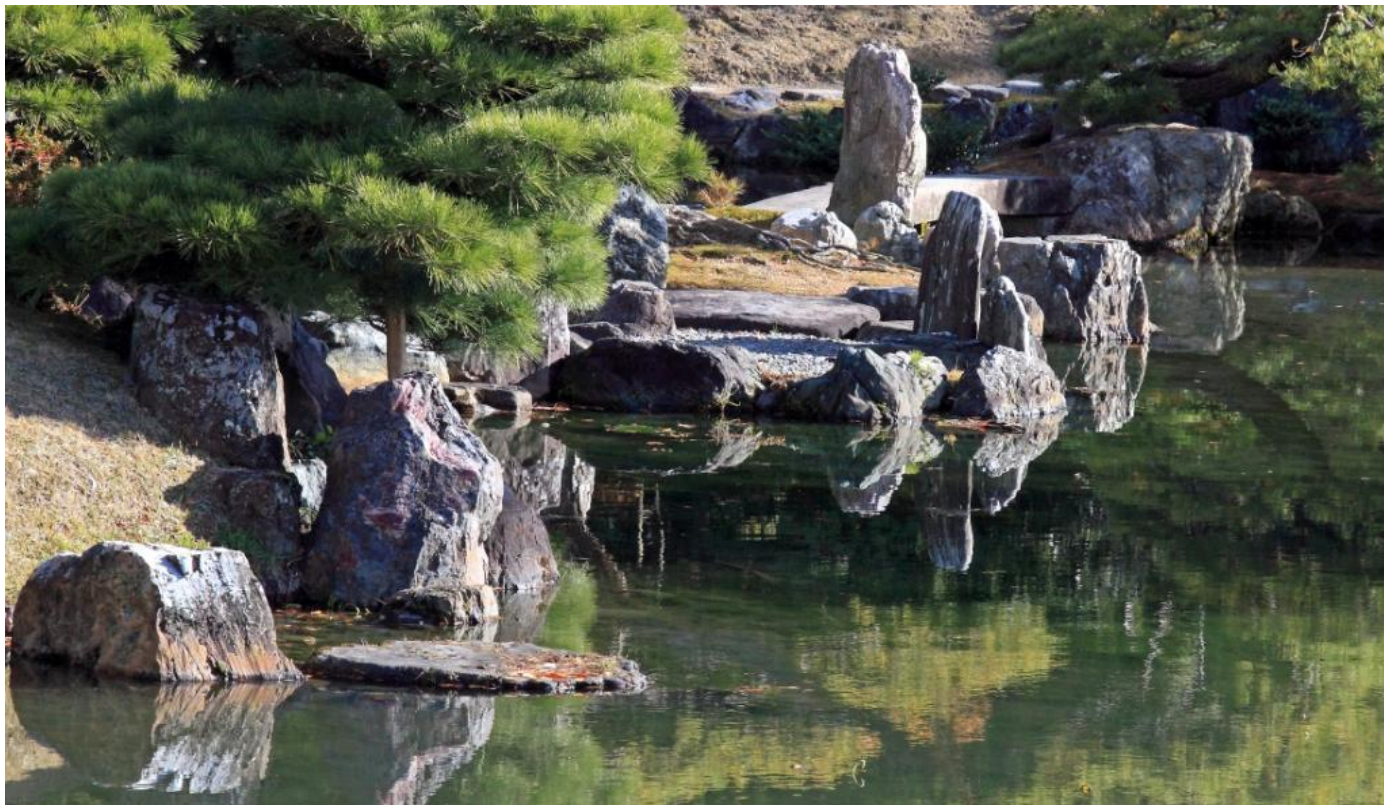


笑意軒 櫂の雲海(写真中央の奥)は夏を表わしている



月波楼 鎌形の手水は実りの秋を表わしている

秀逸な護岸石組み



桂離宮には力任せの石組は少ないが、この写真の石組のように立石と横石(石橋)を使い、かつ出入りが大きく変化に富んだ瀟洒な石組みは秀逸である。



